

POLE

第106号
北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」
2022.5.20

第100回
例会



ソビエト連邦がひた隠しにした歴史の闇を照らし出す衝撃作！
実在したジャーナリスト、ガレス・ジョーンズによる告発の物語



2022.6.1 (水) 18:30～
札幌エルプラザ4階中研修室(北8西3)

18:30【お話】池田光良 博士(工学)、技術士
(応用理学)、APEC エンジニア (Civil)
19:00【ビデオ鑑賞会】
『赤い闇 スターリンの冷たい大地で』
21:00【交流会】感想・意見交換

■2019年製作 | 118分 | PG12 | ポーランド・イギリス・ウクライナ合作 | 原題: Mr. Jones
■2019年 第69回ベルリン国際映画祭コンペティション部門出品

『赤い闇～スターリンの冷たい大地で』は、シアターキノでも以前上映したのですが、当時のウクライナの立場が非常によくわかる作品です。未見の方はぜひご覧になってみてください。(中島洋)

ポーランド映画『赤い闇』は、スターリン体制にひとり立ち向かったジャーナリストの実話に基づく歴史ドラマ。ソ連の過酷な収奪・弾圧と徹底した情報統制の実態が暴かれる。

英国人記者ガレス・ジョーンズは、世界恐慌の嵐のなかソ連だけがなぜ経済的繁栄を誇っているのか？これは共産主義成功の証しか？疑問をもち、取材のため単身モスクワを訪れ、ウクライナ潜入を試みる。厳重な監視のなか、彼は母が暮らした土地にたどり着けるだろうか…

映画で描かれる1932～33年ウクライナにおける(食糧徴発による)人為的大飢饉(ホロドモール)では、400万～700万人強が餓死または強制収容所で死亡したと推定され、スターリンによる「ウクライナ人に対するジェノサイド」として十数カ国が認定している。

■主な登場人物

- ・ガレス・ジョーンズ: 主人公。ロイド・ジョージ 英国首相の外交顧問、ヒトラーへの取材など華麗な経歴をもつ若き英国人記者
- ・ポール・クレブ: モスクワにいる彼の友人記者。「大きな情報をつかんだ、想像以上に厄介な状況だ…」と電話で伝えるが、突然消息を断つ。

・ウォルター・デュランティ: ピューリッツァー賞受賞記者。ニューヨーク・タイムズモスクワ支局長。ソ連に同調し大飢饉の事実を否定。

・エイダ・ブルックス: ニューヨーク・タイムズモスクワ支局の女性記者。ナチス・ドイツから逃れソ連に期待を賭けたが…

・ジョージ・オーウェル: (映画の時点では) 新進作家。後に、スターリン体制を痛烈に批判した風刺小説『動物農場』(1945)、全体主義的ディストピアを描いた『1984年』(49)などで有名になる。『動物農場』の農場主の名前が“ジョーンズ”なのも興味深い。



登場人物(左から)
ウォルター・デュランティ / ガレス・ジョーンズ / エイダ・ブルックス

■アグニェシュカ・ホランド Agnieszka Holland 監督



1948年ワルシャワ生まれ。プラハで映画制作を学び、70年代からアンジェイ・ワイダ運営の映画ユニット「X」に所属しワイダ作品の脚本も手掛ける。1980年、国際映画批評家連盟賞受賞。翌年の戒厳令を機に西欧に移住。86年アカデミー外国語映画賞ノミネート、91年『僕を愛したふたつの国～ヨーロッパ ヨーロッパ』でアカデミー脚本賞ノミネートなど、世界中を舞台に活躍している。

photo by Sławek 2011/9 (文 氏間多伊子)

【入場無料】申込み先↓(必須: 氏名・連絡先をお知らせください)

☎ 011-384-5984 (園部、Fax 共) / ✉ hokkaidopolandca@gmail.com

※会場が休館となる場合は延期または中止します。感染防止のため手指消毒・マスク着用をお願いします。



『ピアノ～ウクライナの尊厳を守る闘い』を観て

池田光良・氏間多伊子・小笠原正明・川染雅嗣・徳田貴子

《緊急座談会》日本初公開の本作を動画配信サービスから購入・視聴し感想をシェアしました。「アジアンドキュメンタリーズ」*単品購入 視聴期限7日間〈ウクライナ緊急支援企画/視聴料寄付プロジェクト〉

ウクライナでの戦争

氏間:2022年2月24日、ロシア軍のウクライナ侵攻が世界中を震撼させました！この出来事をみなさんはどう受け止められましたか？

川染:侵攻の前から、ロシア軍がウクライナとの国境付近に集結しているというニュースに、なんだかキナ臭い印象を抱いていましたが、まさか本当に侵攻するとは驚き以外の何ものでもありません。政治的な解決方法は本当になかったのかという思いです。大変不謹慎な話ですが、ロシアのウクライナ侵攻の際を突いて北方領土を奪い返してしまえば良いとさえ、一瞬思っていました(笑)。

また、2020年2月に北イタリアにある昭和音楽大学の研修所にピアノの学生たちを連れて参りましたとき、室内楽の助演をお願いしたチェリストが、カティヤというウクライナからの留学生でした。彼女はイタリアの音楽院で教鞭をとる、ある高名なロシア人チェリストに師事するべくイタリアに来ていました。若いながらも素晴らしい演奏家で、拙い学生たちの演奏にも根気強く向き合ってくれました。ウクライナ侵攻のニュースを聞いてすぐに思い浮かんだのは彼女のことでした。カティヤはどうしているだろう、ウクライナに戻ってこの騒動に巻き込まれてはいないだろうか、と。

徳田:私はアナスタシヤというウクライナ出身のピアニストのことが真っ先に思い浮かびました。2014年クリミア併合の当時マイアミ大学の博士課程にいて、彼女からウクライナの状況を聞いていたんです。ハルキウ(ハリコフ)に住む彼女のご家族のことや、アメリカにいる同僚の気持ちを考えると、とても他人事とは思えず胸が張り裂ける思いです。

映像の中のウクライナ

氏間:映画では、多くの音楽家が地下シェルターから演奏風景の動画を配信していました。芸術や文

化遺産が無残に破壊され命の危機と向き合っている現状に、何かできないかと途方に暮れます。

普段から何本も映画をご覧になっている池田さんはいかがですか？

池田:いやな予感が当たってしまい残念です。というのは本作を見る前に、ウクライナ・スターリニズムに関する映画『赤い闇』、『DAU.』シリーズなどを6本見たり、スターリンを批判して投獄されたのち、1962年にノーベル賞を受賞したロシアの理論物理学者レフ・ランダウに関する本を5冊読んだりして、ウクライナの状況を危惧していましたから。

氏間:すごい情報収集量ですね！8年前に自由と尊厳のため立ち上がったウクライナがよくわかる映像が今回緊急配信されたのでシェアしました！

ロシアやポーランドにご滞在経験のある小笠原さんはご覧になっていかがでしたか？

小笠原:マイダン革命のきっかけとなった2013年のキーウ(キエフ)独立広場のデモを、私はロシアで見ました。12月に1週間ユジノサハリンスクに滞在しているあいだホテルのテレビはこの騒動を報道し続け、ロシア人は騒動が長引いているのはNATO 諸国によるデモ隊支援のせいだと非難していました。遠いウクライナでの事件の映像はいつも遠景で、独立広場のデモ隊のたき火と背景の黒い建物のシルエットだけが記憶に残っています。

映画『ピアノ』は翌2014年2月に起こった革命をウクライナ側から描いていますが、ロシアのテレビ映像と比べて格段に色彩豊かで、登場人物ひとり一人の言葉や表情からその人の生き方が伝わってくるのが印象的です。人々が内的動機に基づいて、それぞれのやり方で運動に係わっていることがよくわかります。この2つの映像は基本的に同じ事件を違う視点から描いたものですが、そのあいだに存在する断絶の深さは、日本という「安全圏」にいる私たちの想像を超えています。

ポーランドの人々

氏間:ポーランドにご友人も多いと思いますが、何かお聞きになっていますか？

小笠原:ウクライナ避難民に対するポーランド人のホスピタリティーには感動します。テレビ報道でよく見る、国境の町メディカの避難民の長い列は、私自身1980年のポーランドの「連帯革命」のとき食料品売り場で経験した行列とよく似ています。繰り返し同じような経験をしてきた民族として、ポーランド人は避難民に降りかかった災難を他人事とは思えないのでしょう。

私のポーランドの友人はこの2年間コロナ禍を避けて郊外のコテージに住んでいますが、いまはウッチの本宅を8人のウクライナからの避難民(うち2人は子供)に提供しているそうです。両民族は精神的にシームレスにつながっていますね。

「革命」エチュード

氏間:徳田さんは視聴されていかがでしたか？

徳田:音楽のパワーに改めて圧倒されました。人々の気持ちに訴えかける力、それをつなぐ力、恐怖さえも消し去る力を場面から感じました。

21世紀の今、ショパンの「革命」エチュードが、なぜコンサートホールではなく、焼け焦げたバスの上の不安定なステージで演奏されるのかと、衝撃を受けました。ショパンをはじめ当時の作曲家たちが、悲惨な歴史に翻弄され悲しみに暮れる人々の気持ちを十分に表現し後世に伝えてくれているのに、なぜ再び同じ底なしの悲しみが今起こるのだらうと、息が詰まる思いでした。

川染:私はこの映画のことは今回初めて知りました。アントワネットがショパンの「革命」を弾くシーンはショパン自身のエピソードを彷彿とさせ、彼女の姿を借りてショパンが姿を現したかのようにみえます。政府が大音響で流す「ロシアンポップスにはベートーヴェンで勝負よ！」と叫ぶシーンも痛快ですね。しかしなんととっても印象的なのは、広場に置かれたピアノで最初に弾いた曲はウクライナ国歌、ということなんです。この革命が国の命運を左右することの象徴ではないでしょうか。

関連作品 (日本、シリアほか)

池田:この映画は短編ながら平和への希求がよく描かれている秀作です。ピアノの修復から演奏にいたる物語には感銘を受けました。これは黒澤明監督の名作『八月の狂詩曲(ラプソディー)』(1991)

で壊れたオルガンを修理してシューベルトの『野ばら』を演奏するシーンと重なります。楽器の修復は平和の回復への祈りを象徴しています。また、被爆者追悼の般若心経の流れる中、蟻が赤いバラを登っていく素晴らしいシーンもあります。最後に主人公の「おばあちゃん」が傘をオチョコにしながら嵐の中を進んでいくシーンに『野ばら』が重なり、原爆で焼けただれた聖母マリア像の場面やエンディングにヴィヴァルディの『スターバト・マーテル』の『母は悲しみにありき』が流れます。これらのシーンが黒澤作品を名作にしています。

氏間:聖母像は覚えてます！長崎が舞台でリチャード・ギアも登場しましたね(笑)。確かにオルガンの修復と選曲には平和への祈りと強い平和願望が感じられますね。

川染さんは後半の『ピアノ』の修復の場面をどうご覧になりましたか？

川染:ピアノを修理した後、夜遅くに試弾していると男が苦情を言うてくる場面は、全ての市民がピアノを軸に団結しているわけではないこと、音楽が持つ力は絶対ではないことも示しています。また、アントワネットに罵詈雑言を浴びせるテント村の男たちは何者でしょう。中には肘から先を失った男もいます。彼らは市民とも、義勇兵とも、機動隊とも違った空気感を持っています。ウクライナに広まっているというネオナチの連中でしょうか。彼らも音楽やピアノには全く関心がありません。

氏間:そうですね。いたるところでアントワネットのいじらしさと不屈の精神力が垣間見えます。彼女が泣き出してしまふのはとハラハラしました。

さらにおススメの作品に『ウィンター・オン・ファイヤー〜ウクライナ自由への闘い』*(2015)という同じマイダン革命93日間の記録映画があります。そこにもアントワネットがショパンの「革命」を弾く場面が写っているんですが、その時は妨害の騒音はないですね。音処理か？別の日の演奏か？…

ほかに『娘は戦場で生まれた』(2019)は内戦に揺れるシリアのアレッポの惨状をとらえています。母となった若い女性が自らカメラを回し続けた緊迫のドキュメンタリーです。アレッポといえばオリーブの石鹸で有名ですね。現在のウクライナ・マリウポリの壊滅状態はアレッポと全く同じです。

『ピアノ』

ところで、『ピアノ』で一番印象に残ったのはどこですか？

* <https://youtu.be/yZNxLzFfR5w>

小笠原:この映画の主役は、幅わずか70メートルの機動隊とデモ隊との緩衝地帯に置かれた古ぼけたピアノです。あの場で国歌「ウクライナの栄光は滅びず」を歌った人々はその時の感動を一生忘れないでしょう。私も、いまにも崩れ落ちそうなステージ上で演奏されたショパンの曲ほど魂を揺さぶるものはないと感じました。人々がピアノを囲んで楽しげに歌っていたウクライナの音楽は、私の好きなロシア民謡と驚くほどよく似ています。

機動隊側は妨害のため大音量の音楽を流しますが、そのこと自体、ピアノの音が、どちら側に属するにせよ、その場に居あわせた人々の心を強く捉えていたことを雄弁に物語っています。おそらくそれが、この映画における唯一の救いであり、製作者のいちばん訴えたかったことだと思います。

川染:冒頭のレッスンシーンが印象的でした。演奏曲は知りませんでしたが、技術ではなく心で弾くレッスンですね。どこのメーカーのピアノか分かりませんが、ペダルが2本しかないのが相当古いものに違いありません。また、レッスンの場所があまりにも殺風景で驚きました。これで思い出すのはワルシャワ音楽院の劣悪な練習室の有様です。そもそも練習室の数が少なく、学生たちはありとあらゆる手段を講じて練習室を確保していました。

ほかに妻と生まれたばかりの子供を亡くした覆面の男が語るシーンは深く心に響きました。彼はマイケル・ナイマンの曲と思しき作品を弾いていました。ナイマンといえば『ピアノ・レッスン The Piano』*(1993)です。この映画の悲劇的な結末と、覆面の男の不幸が重なり合って、観るのが辛いシーンでした。
* https://youtu.be/hWily_5WCeY

徳田:私も覆面の男ボーデンが今は亡き戦友を想って作曲したという曲の演奏場面に心打たれましたね。ハーモニーが移り変わるごとに広がる響きの中に、言葉では言い表されない、逃れられない運命、悲しみ、孤独があふれていました。

氏間:私も覆面の元ピアニストの言葉にはぐっときました。「彼はそこで殺された。ひどい死に様だった。昨晚彼の夢を見た。彼はこう言った。“どんなことも受け入れるが、あんな無様な死に方はイ

ヤだ”彼が死んだ時こう感じたんだ。まるで背中の壁が崩れるかのように彼は死んだ。それでおしまい。俺はもう一人ぼっちなんだ」と。このシーンのこぼれ落ちることばを急いで書き留めました！

池田:確かに壊れたピアノを修理し持ち出すのに非協力的だったテント村の指導者たちとは違って、覆面の元ピアニストのその曲は義勇軍の一兵卒たちの心にも響く良い曲だったと思います。

そして最後に修理されたピアノはトラックに載せられ、どこかに運ばれていきます。まるで希望に向かって進むかのように。

氏間:最後のシーンはピアノを通して多くのことをあぶりだし複雑な感情の余韻を残し、とても豊かな時間を与えてくれますね。

監督のご両親とのご縁

実はつい最近知ったんですが、この作品の監督ビータ・ドリガスさん=写真=のご両親に、なんと2013年6月にお会いしてたんす！東京の「EU フィルムデーズ」のあと札幌にみえて、「ポーランド映画セレクションⅢ」の舞台挨拶、三笠の炭鉱跡地視察、小樽、白老ポロトコタンと3日間ご一緒しました。(ポ文協の公式サイトで POLE78-79 号**をご覧ください！)(笑)

父上のマチェイ・ドリガス監督は1956年ポーランドのウッチ生まれ、81年全ロシア映画大学を卒業後、クシシュトフ・ケシロフスキ監督の助手を務めた方で『私の叫びを聞け』(1991)を、また母上のリトアニア出身の映像作家ヴィタ・ジェラケヴィチュテ監督は『統合失調症』(2001)を携えての来日でした。

両監督は、社会問題、歴史事件をテーマとしつつ、そこに必ず人間の内面の声を響かせ素材を「映像詩」へとまとめ上げていく手腕や歴史に対する誠実さが特徴です。「ポーランドドキュメンタリー派」を代表し国際的に評価の高いご両親の影響は、この作品にも深く感じ取ることができます。

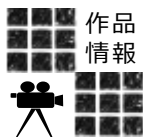
(いけだ・みつよし、うじま・たいこ、おがさわら・まさあき、かわそめ・まさし、とくだ・たかこ)



ビータ ドリガス

監督: Vita Drygas | 2015年 | 41分 | ポーランド | 原題: PIANO

映画祭/受賞歴<年>: MiradasDoc (スペイン) グランプリ<2017>、ヴィルニウス国際映画祭 (リトアニア)・ポーランド映画賞イーグル最優秀ドキュメンタリー賞・パルヌ映画祭 (エストニア)・堤川国際音楽映画祭 (韓国)・モトヴン映画祭 (クロアチア) <以上 2016>、クラクフ映画祭 (ポーランド) <2015>



作品
情報

アマレヤ
とともに

アマレヤ劇団の方々と一緒に対雁を訪れて

(語り) 榎木 貴美子、(聞き手) 新井 藤子

私達アイヌ女性とアマレヤ劇団の方々の交流がいつから始まったのかはもう思い出せませんが、今日もアマレヤ劇団とのコラボで、パフォーマンスの撮影を頑張ってきました。親交を重ねるうちに、明治時代の樺太アイヌの歴史に触れる機会もあって、札幌のお隣、江別の対雁に大勢の樺太アイヌが連れて来られ、亡くなったことをアマレヤの女性達にお話したこともあります。

私の語り～樺太アイヌとして



何故、樺太アイヌの方々の尊い命が犠牲になってしまったのか？1875(明治8)年千島・樺太交換条約

によって、宗谷に近いアニワ湾一带に住んでいた樺太アイヌ841名が宗谷に移住。宗谷岬から樺太までの距離は約43キロ。晴れた日には岬から樺太が肉眼で見えます。当時の北海道長官、黒田清隆は、望郷の念にかられて逃げ帰る者がいては困ると考え、翌1876(明治9)年、行く先も告げずに樺太アイヌ854名、更に、宗谷で暮らしていた樺太アイヌを無理矢理船に乗せました。最初は、樺太に近い宗谷なら、いつでも帰ることができると考えた者もいましたが、宗谷から離れ、そのうち樺太が見えなくなり、利尻島も遠ざかっていく。その不安たる気持ちはいかばかりか…？留萌沖辺りまで来て、ようやく行く先を聞かされる。憤慨のあまり血を吐き、船上で憤死する者も出た程でした。

ツインカリ
皆で対雁へ

私の語りから、是非とも対雁に連れて行ってほしいというお話になりました。アマレヤの女性は元々、私達樺太アイヌ女性の先輩にあたるチュフサンマさんが、ポーランドの樺太アイヌ研究の先覚者ブロニスワフ・ピウスツキ(1866-1918)と結婚して二児をもうけた経緯があることを知っていて、樺太アイヌに大変な好意を持って下さったのです。私達のご縁を結んで下さった丸山博先生の記録によると、この日は2018年の10月11日。夕暮れが迫る中、通訳の方々とも一緒になって皆で対雁へ向かいました。

まずは当時樺太アイヌが住んでいた場所。その場所の半分は、現在石狩川の河川敷に、残りの半分は石狩川の川底になっています。この荒涼とした場所で、約400名近くが天然痘やコレラによって命を落としました。

次に榎本武揚が払い下げ、所有していた10万坪の土地。駐露特命全権公使として千島・樺太交

換条約に調印した榎本は、そこに「海の民」といわれていた樺太アイヌを強制的に農業に従事せよとしたと思われます。河川敷側の道を一本渡ると現在は公園になっていて、高い五角形の台座の上で馬に乗って片手を前に指し示す榎本武揚の銅像が建っています。ここを訪れるたび、支配する者と抑圧された者にはこんなにも雲泥の差があるものなのかと胸が痛む思いがします。

最後はすぐ近くの江別市営墓地、樺太アイヌの大勢のウタリ(同胞)が眠る場所を案内しました。忘れてはならない大事な歴史のためにお墓があります。しかし、「樺太移住旧土人先祖の墓」と刻まれたこのお墓には、ご遺骨が入っていません。1日に何人もの方々が亡くなったため、大きな穴が掘られ、そこにまとめて葬られ、火葬されたのです。

辺りは薄暗くなり始めていましたが、持参した樺太アイヌの弦楽器、トンコリをお墓の前で演奏しながら歌いました。最後の語りの時には、アマレヤの方々が涙ぐんでいるのが暗がりの中でも私の目にははっきりと見えていました。



現在のコロナ禍にも通じること

丸山先生は「アマレヤの方々にとっては、対雁でのこの心の体験が、アイヌ女性達とのパフォーマンスを続けていく上での原動力のひとつになっている」と仰って下さいました。明治時代、樺太アイヌの先人の皆様は、天然痘やコレラで大変なご心痛とご苦勞をされたことは、令和の現在、コロナと名前が変わっても、皆大変な目に遭っていることに通じるところがあると思います。最近では感染者も少なくなり、とても喜んでいましたが、またまた変異株が現われて来て、心穏やかではありませんね。

あの日、お墓の前では「ポーランドの方々と一緒にお参りに来ました、今日はこれで帰りますが、また来ます」とお約束して帰路につきました。私達の交流とパフォーマンスの発展はまだまだ続きます。

(ならき・きみこ、樺太アイヌ協会、あらい・ふじこ)

=写真=左:榎木貴美子、右:対雁の風景をカメラに収めるアマレヤ劇団の女性(写真 丸山博)



アイヌ女性とアマレヤ劇団の 5年間の繋がり

多原 良子



アイヌ民族には独自の文化や風習、慣習、自然との関わりや、精神文化があります。アイヌの先祖が暮らした伝統時代に思いを馳せてみましょう。

広大な大地、果てしなく広がる海原、流れゆく川、豊かな自然の中を動物が往来し、山野にはたくさんの植物が群生して、その中にコタンがありアイヌは日々の生活を営んでいました。

平穏な暮らしのなかに、たくさんの自然現象が去来した事でしょう。アイヌは、人間のまわりに存在する事象には「魂」が宿っていると考えました。この「魂」をいわゆる「神」とは違った次元で捉えて、人間生活に貢献するもの、なくてはならない、人間の力ではどうしようもない魂の強いものを神として意識しました。人間の認識の度合いで神のランクが決まったようです。

ポーランドとアイヌ民族

ポーランドは東西を強国に挟まれ幾度となく領土を奪われたり、分割されたり、国じたい地図上から消えてしまった悲惨な歴史を歩んだといわれます。ポーランド人は、その苦難の時代をいながらも、民主化運動の末に見事に再興しました。

アイヌ民族もまた、何の相談もなく樺太・千島交換条約を日本とロシアで締結し、樺太アイヌ、千島アイヌは強制移住を余儀なくされました。慣れない土地での生活は困難を極め、移住先では半数以上が亡くなりました。千島アイヌは現在名乗る人もなくその文化は消え去りました。

1869年、蝦夷地(北海道)は一方向的に日本の領土とされ、アイヌ民族はすべての生活手段を奪われ、構造的な差別の中で伝統的な生き方ができなくなりました。とりわけアイヌ女性は「ジェンダーと民族差別の交差性」、差別が複合的・重層的に絡み合う過酷な「複合差別」に苦しんできました。長年の貧困や偏見による差別でアイヌ女性は、自信を失っていました。

メノコモシモシとアマレヤ

複合差別から脱却し、アイヌ女性が誇りをもって生きるために主体的な活動が重要と考え、2017年に「アイヌ女性会議メノコモシモシ」を立ち上げました。「モシ」はアイヌ語で“目覚める”という意味です。先祖から受け継いだ智慧を発信しエンパワメントするとの思いを込めた名称です。

ポーランドのアマレヤ劇団との繋がり、5年前札幌で「歴史に翻弄された先住民族女性」をテーマにした現代劇でコラボしたことがきっかけです。メンバーの一人が舞踏劇に参加し、アイヌ民族と同じような歴史をたどった先住民族女性を描いた物語に学び、新たなアイヌ女性の生き方を教えられたのです。

『アイヌとカムイのためのレクイエム』

昨年、アマレヤとメノコモシモシで『アイヌとカムイのためのレクイエム』の共同公演をし、その一セッションに初めて参加しました。芸術は解らない、まったく縁がない、そんな感性もない自分でしたが、言われるままに演じていると自分の魂の奥にあったものが、ふつふつと不思議な感覚で沸いてくるのを感じたのです。やりたい事・やるべき事はこれだと思える事がはっきりと解りました。もしこのような機会がなければ、自分の魂の叫びに気づかずじいたのかもしれません。参加メンバーは、それぞれの魂や心の叫びを感じ取り、喜びに目覚めたことと思います。これが『レクイエム』をやった意味だと思いました。

アマレヤ劇団とメノコモシモシがこのように繋がったことを振り返ると、今もって不思議な縁を感じざるを得ません。1887年ピウスツキが政治犯としてサハリン島に流刑され、樺太アイヌのチュフサンマと運命的な出会いの末恋仲となり結婚しました。百年以上前の二人が私たちに導き繋いでくれたのかもしれない、そんな気がしてならないのです。アマレヤとメノコモシモシお互いの歴史を見つめ尊重し、また新たな未来に繋ぐものを、これからも造りだしていけることを願っています。



メノコモシモシ&アマレヤ合同公演
2019.9.28 写真 尾形芳秀

(たはら・りょうこ、アイヌ女性会議メノコモシモシ代表)

参考文献:アイヌ民族博物館監修

『アイヌ文化の基礎知識』草風館、1993



アイヌとカムイのための レクイエム

丸山 博



アマレヤ（ポーランド）とメノコモシモシ（アイヌ女性会議）との共演第4作『アイヌとカムイのためのレクイエム』は、コロナ禍の中で得られた数少ない成果の一つです。それはアイヌ女性の文化的蓄積とポーランド女性アーティストとの数年に及ぶ共演によって培われた能力が芸術を通して開花した瞬間です。

2021年のはじめには、日本の舞踏(Butoh)の研究者でアマレヤ劇団の芸術監督、カタジナ・パストウシヤクの振付のもと、ポーランドとアイヌの女性アーティストが一つの舞台で共演する計画でした。しかし9月になって、日本の後手後手のコロナ対策ではアマレヤのメンバーが11月には入国できないと判断し、オンライン上でポーランドと日本のチームがそれぞれ『アイヌとカムイのためのレクイエム』のタイトルで作品を映像化することにしました。

10月、動画作成のために、非商業ベースで優れたドキュメンタリー作品を制作している藤野知明監督を迎え、毎週2度のペースで打ち合わせを行った後、札幌の二か所で撮影を行い、12月30日、双方の作品を YouTube に同時にアップしました。

札幌で

日本側の作品は、藤野監督が場面を分割し、各場面の動きをメノコモシモシの出演者に質問するところから始まりました。出演者は、多原良子、松平亜美(つぐみ)を中心にアイヌの歴史や文化をもとに各々の動作や振り付けを考え、野外での撮影に臨みました。撮影初日は11月下旬の冷たい雨が降り続く日でしたが、皆、演技に集中し、夕方暗くなるまで撮影を続けました=写真前頁左=。12月には、ポーランドのマルチメディア・アーティスト、ベアタ・ソスノフスカが描いた出演者全員の肖像画が届き、同じ場所で後半の撮影、別の場所で最後のシーン=↑左=を撮りました。

全体を通してみると、入れ墨や耳輪を禁止されながらも先祖やカムイに感謝し、文化の火を絶やさず自らのアイデンティティを取り戻していくアイヌ女性の強さが淡々と演じられました。個人に着目すると、多原の虚飾のない演技、松平の類まれな身体表現に檜木貴美子、斎藤芳子、加賀谷京子のいぶし銀の演技が相まって、アイヌ女性の新たな境地を切り開きました。

撮影が終わるとさっぽろ自由学校「遊」の教室で多原の物悲しい歌声や檜木のムックリやトンコリの淀みのない演奏が録音され、その後、藤野監督の

手によって美しい映像と一体化しました。こうして明治以降の北海道の植民地化の中を生き抜いたアイヌ女性の連綿とした歴史がわずか18分の映像に集約されました。アイヌ女性による現代芸術が生まれた、歴史的瞬間です。

その陰には、カタジナ・パストウシヤクをはじめ、ナタリア・ヒリンスカ、ベアタ・ソスノフスカ、カロリナ・ユジヴィアク、ヨアンナ・ボロフ、アレクサンドラ・シリヴィンスカ、エルジビエタ・ウィシアク=パストウシヤクから、ポーランドの女性アーティストの温かい眼差しと献身的な関与がありました。

ポーランドで

ポーランド側はアマレヤのメンバーにベアタ・ソスノフスカからが加わり、日本側より2、3日遅れで作品が完成しました。映像の前半では、雪の積もった林の中で木々に吊るされた小さな流木を女性の手がつかもうとしてもつかめない状況が長い間映し出されました=写真前頁右=。後半は一転してポーランド女性アーティスト5人がそれぞれメノコモシモシの出演者5人の肖像画を抱えてグダンスクの市街地を歩く場面がスローモーションで描かれました=↑右=。前半はポーランド女性がアイヌ女性の苦難を追体験し、後半はアイヌの女性への敬意、連帯を表しているといえるでしょう。

今後の計画

2022年には、メノコモシモシはアマレヤとの共同制作、共演の継続に加えて、元駐日ポーランド大使で能の研究者、ヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカ博士がポーランドの国民的詩人アダム・ミツキエヴィチの『祖霊祭』をもとに2023年に制作を予定している『ポーランドとアイヌの祖霊祭』のリハーサルにも参加する予定です。100年以上前にブロンスワフ・ピウスツキによってつくられたポーランド人、アイヌ、日本人の絆を受け継ぎ、次世代に渡していくために、皆さまには、引き続きご支援を賜りますよう、よろしく願いいたします。(まるやま・ひろし、CEMiPoS* 環境とマイノリティ政策研究センター所長)

ブロニスワフ・ピウスツキに関する 新刊書の出版記念会

ヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカ

2022年1月15日、スレクヴェクのユゼフ・ピウスツキ博物館において、ブロニスワフ・ピウスツキに関する重要な新刊書①②の出版記念会が、同博物館と国立在外ポーランド文化遺産研究所「ポロニカ」の共催で開催されました。

①『ブロニスワフ・ピウスツキ伝～〈アイヌ王〉と呼ばれたポーランド人 *Opowieść o Bronisławie Piłsudskim. Polak nazwany Królem Ajnów*』沢田和彦著、バルバラ・スウォムカ Barbara Słomka 訳。この翻訳本はブロニスワフやヴァツワフ・シェロシェフスキによるサハリン(1902-05)、北海道(1903)探検旅行から約120年後に、日本の国際交流基金とクラフの日本美術技術博物館マンガの協力を得て当館から出版されました。=下図、左の書籍=

②『ブロニスワフ・ピウスツキ～日記 *Bronisław Piłsudski. Dziennik 1882-1885*』は、手稿をもとにヨランタ・ジンドゥル Jolanta Żyndul 教授が校閲し、国立ポロニカ研究所から出版されたもう一つの代表的な自伝資料です。=右の書籍=



『ピウスツキ伝』

これまでポーランドには、アントニ・クチンスキ Antoni Kuczyński 教授、アルフレッド・マイェヴィチ Alfred F. Majewicz 教授らのブロニスワフに関する学術論文や、パヴェウ・ゴジリンスキ Paweł Goźliński (『アカン Akan』2019)、ジグムント・ミウオシェフスキ Zygmunt Miłoszewski (『価格の問題 *Kwestia ceny*』2020) の小説、イェジー・ホチウオフスキ Jerzy Chociłowski の大衆向け読み物『ブロニスワフ・ピウスツキの運命との決闘 *Bronisława Piłsudskiego pojedynek z losem*』(2018) などがあるだけでした。

ブロニスワフの物語は、民族や言語、信仰、習慣、容姿の異なる人々の間の絆の一例です。彼の〈弱小〉民族への接し方は、どこが際立っていたのか？なぜ彼は「アイヌ王」と呼ばれ、彼のために歌がいくつも作られたのか？今日(ユゼフ・ヴィンツェンティ・ピウスツキ Józef Wincenty Piłsudski のあと)ピウスツキという姓を名乗ることができる唯一の人物は、どうして日本人なのか？極東の僻遠の地にポーランド人がやってきたのはなぜか？そして最後に、領地でこの青年を形成したものと、アジアで成人した

彼が行った選択との間には関連があるのか？

『日記 1882-1885』

今や私たちは、伝記だけでなく、ブロニスワフ・ピウスツキの『日記』を読んで、これらの疑問のすべてに答えることができるでしょう。『日記 1882-1885』の手稿は、ヴィルニユスの科学アカデミー・ヴルブレフスキ図書館のアーカイヴに保管されています。ヴィルニユス本はポーランド文学の記念碑であり、歴史家や19世紀末のポーランド・ヴィルニユスの風土を知りたい人にとって貴重な資料です。若きブロニスワフの文書は、日々の家庭生活や高校生の思索、そしてヴィルニユスでの彼の生活環境の風俗に関する情報などをまとめた複雑な物語です。ここでは、成熟途上にある人物の動揺をたどり、若者の成長のあとを追うことができます。



出版記念会=上写真=は3部構成でした。

まず、ロベルト・アンジェイチック Robert Andrzejczyk 当館館長、ドロタ・ヤニシェフスカ=ヤクビヤク Dorota Janiszewska-Jakubiak 国立ポロニカ研究所所長が参加者に歓迎の挨拶を述べ、次に元駐日ポーランド共和国大使で現在当館開発部長のヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカが登場しました。続いて在ポーランド日本国大使館広報文化センター所長の牧野道子さんが素晴らしいポーランド語で挨拶し、またユゼフ・ピウスツキのひ孫にあたるダヌタ・オニシュケヴィチさんがブロニスワフに魅了された自分の物語を語りました。

第一部では、日本から沢田和彦教授とブロニスワフの孫である木村和保さんのビデオメッセージが紹介されました。沢田先生は、本書の長年にわたる準備や、訳者バルバラ・スウォムカさんとの共同作業について語り、日本語原版(2019年、成文社)

の出版を支援した駐日ポーランド大使館と、ポーランド語版に共同で助成した国際交流基金とクラクフの日本美術技術博物館マンガに謝意を表しました。

木村さんは日本の原著者とポーランドの訳者に、日本ではあまり知られていない弟のユゼフについて、日本人向けの本を書くか、映画(ドキュメンタリーかフィクション)を作ることを提案しました！

その後、当館の編集者ズビグニェフ・ジェジッチ Zbigniew Dziedzic さん、エヴァ・パワシュ=ルトコフスカ Ewa Palasz-Rutkowska 教授、バルバラ・スウォムカさん、マンガ博物館副館長のカタジナ・ノヴァク Katarzyna Nowak さんによるディスカッションが行われ、ピウスツキの極東での活動の歴史的背景、この本の特长、翻訳の難しさ、そして最後にブロニスワフ・ピウスツキの人物像を広めるためのポーランド公館の活動が紹介されました。1980年代に日本の専門家がレーザー技術を使ってピウスツキの録音を復元した偉業が語られました。残念ながら、ピウスツキのろう管が日本で修復を終えてポーランドに戻った後どうなったかはわかりません。再び姿を消したようです。

第2部には『日記 1882-1885』の出版を記念して、ヨランタ・ジンドゥル教授(歴史家、ジャーナリスト)、レシェク・ザシトウト Leszek Zasztowt 教授(ワルシャワ大学 歴史学者)、ゲストとしてリマンタス・ミクニス Rimantas Miknys 博士(元リトアニア歴史研究所所長)が参加しました。聞き手は国立ポロニカ研究所の

オルガ・クハルチク Olga Kucharczyk 博士で、特別ゲストとしてヴィルニユスのリトアニア科学アカデミー図書館のシギタス・ナルブタス Sigitas Narbutas 館長がオンライン参加、ブロニスワフが1882年につけ始めた日記の原本と革張りの小さなノートを見せました。

2冊の本の著者らによるパネルディスカッションの合間に、ピウスツキが1902～05年にアイヌの声を録音したのと同じエジソン式蓄音機をルブリンの旧ポーランド・リトアニア共和国東部地域博物館からご提供いただき、展示・再生しました。

出版記念会の後にわかったことですが、ブロニスワフの青年期(1882～85)の日記は2021年末にクラクフのアルカナ社からもヴィトルト・コヴァルスキ Witold Kowalski 氏の序文と後書き付きで出版されています。手稿からタイプライターで複製された、ニューヨークのユゼフ・ピウスツキ研究所に保管されているテキストに基づいています。タイプされた『日記』のニューヨーク版テキストには多くの誤りがありました。

記念会には90人の聴衆が参加し、のべ300人超がオンラインイベントをフォローしました。その様子は今も YouTube チャンネル*で視聴できます。

なお、沢田先生の本はワルシャワ大学の学術誌「東方通覧 Przegląd Wschodni」賞2021(海外作品部門)の受賞が決定しました。おめでとうございます。

(Jadwiga Rodowicz-Czechowska ユゼフ・ピウスツキ博物館開発部長、元駐日ポーランド大使) 安藤厚訳

■■■■■■■■■■ 第101回 例会 ■■■■■■■■■■

2022.7.3 (日) 13:30～

札幌エルプラザ4階中研修室(北8西3)

[テーマ]

今年は①ポーランドロマン主義200年②マリア・コノプニツカ生誕180年③ユゼフ・ヴィビツキ没後200年の記念の年です。

またヤドヴィガ・ロドヴィッチ元駐日大使の「ポーランド・アイヌ『祖霊祭』シンヌラップ・クンネニサツ」プロジェクトに協力して詩劇の朗読を行います。

さらに時節柄(平和・安全・安らぎなどへの)「希求」をもう一つのテーマとします。

奮ってご参加ください。(会長 安藤厚)



- 13:30 【ビデオメッセージ】 J. Rodowicz 元駐日大使
 13:40 【第1部】 詩劇『祖霊祭』
 14:20 【第2部】 希求・日本(朗読)
 15:00 【第3部】 希求・ポーランド(朗読、その他)

お問合せ・申込み先(必須:氏名・連絡先を→安藤へ)
 080-4071-0956, hokkaidopolandca@gmail.com

※感染拡大防止にご協力をお願いします。
 (マスク着用、手指消毒等)

共催



協力



* <https://youtu.be/Uxr9aOJ8YQ8>

ブロニスワフ・ピウスツキと紙芝居

～朗読者の対談から～



ぼくは本名はブロニスワフですが、みんなに親しみをこめてプロニシと呼ばれていました。



紙芝居全 18 枚より

新井=↑写真右=「午後のポエジア」に新しい演目加わるだけでなく、ブロニスワフ・ピウスツキ(愛称ではプロニシですが)その語りをポーランド人ジェプカさんがポーランド語で、私が日本語で朗読すると伺ったときから、とても楽しみでした。

ジェプカ=左=:紙芝居自体もポーランド人の作品ですからね。文を寄せたカタジナ・ノヴァクさんはクラクフの「マンガ」館に設立の初めの頃から勤めていて、在ポーランド日本大使館や日本の大学との交流にも尽力し、両国が共有する歴史的な事柄を紹介するイベントも主催しています。この紙芝居もまさにそのひとつです。

新井:最初に目を通したとき、紙芝居としては、日本ではあまり見かけないタイプの内容だと思いました。

ジェプカ:ポーランドでも見たことがありません。子どもたちには、紙芝居という手法そのものも新鮮で面白く感じられると思います。

新井:確かにそうですね。紙芝居のもつ手作りの性質は、プロニシが、作中にも登場するグラレ・コレクションで展示を組み、手工芸を通して人力の大切さを伝えようとしていたことにも通じます。彼は、博物館学の素養が高いことでも、生前から評価されていました。ところで、今回演じるときには、どんなことを心がけられましたか？

ジェプカ:プロニシは大変な人生を送ったので、まずは強そうな声で演じたかった。ところが心の優しさや旺盛な好奇心も持ち合わせている。思いのほか難しい役作りになりました。

新井:私も表現したいプロニシ像があるのですが、さすがに男性の声は出ない(泣)。そこでラジオドラマの声優さんのような女性の朗読を意識しました。

ジェプカ:私より新井さんのほうが声優に向いているのは確かですね(笑)。

新井:そう言っていただくと、救われます(泣笑)。録画を見るとやり直したい部分も目につきますから。録画については、先生もご自身の記事(POLE105 p.2)で触れられていますね。

会場では、紙芝居を背面のスクリーンに大きく映した方が後方の席までもっと見えやすいのではないかと思ったのですが、録画では紙芝居舞台の木の味わいが伝わってとてもよかったです。熊谷さん=↑写真右=の選択に学ぶことは多いですね。

(ラファウ・ジェプカ 事務局長、新井藤子)

ご挨拶

カタジナ・ノヴァク

日本美術技術博物館マンガ副館長



ポーランドの優れた民族言語学者ブロニスワフ・ピウスツキを子どもたちにどうやって見せるか？それには日本の紙芝居のようにこの年齢層にも受け入れられる形が最適でしょう。

『プロニシ・ピウスツキ～遠い東の国で有名になったポーランド人の話』と題された、ピウスツキの生涯と研究についての魅力的な物語は、パウリナ・パジヂェラが美しい挿絵を描き、カタジナ・ノヴァクが文を寄せ、田村和子氏の美しい翻訳によってポーランドと日本の聴衆の間で好評を博しました。

紙芝居には、プロニシの生家、11人の兄弟姉妹、シベリア流刑、アイヌをはじめとするシベリアや日本の先住民との友情、祖国への帰還、ザコパネ高地(グラレ)文化の研究などが描かれています。

私は東京で、初めて紙芝居を実演する機会を得ましたが、若い方は興味をもって受け止め、年配の方には子どもの頃のよい思い出になったようです。

このたび、安藤先生のご尽力で北海道でも日本語版が初演され感謝しています。(安藤厚訳)



《ポーランドだより》13

俳句日本語訳：津田晃岐
przekład na japoński:
Terumichi Tsuda



ポズナン市エスコラピオス会聖ヨゼフ・カラサンス学園

III konkurs literacki "HAIKU - POEZJA JAPOŃSKA" (2022 r.) - NAGRODZONE WIERSZE

Zespół Szkół Zakonu Pijarów im. św. Józefa Kalasancjusza w Poznaniu

płatki śniegu	冷たくも
otulają nas do snu	綿雪包み
mimo ich chłodu	眠らせる
Dominika Jopek, 3A LOg ドミニカ・ヨペク、 高等学校3年A組（三年制）	

zbliża się wiosna	春近し
słońca jest coraz więcej	陽の増えてゆく
w mym małym sercu	胸の内
Gabriela Cieśla, 5B SP ガブリエラ・チェシラ、 小学校5年B組	

wybiła północ	零時打ち
huk bąbelków szampana	シャンパンはじける
masz piękny uśmiech	——いい笑みだ
Miłosz Rekiel, 3D LOg ミウォシュ・レキェル、 高等学校3年D組（三年制）	

◆選評 コンクール組織委員会 津田晃岐

過去2回のコンクールでは、日本語を学習する高校生のみが対象だったが、今回は初めて全校生徒を対象とした。つまり、日本語学習者かどうかを問わず、しかも高校生だけに限らず、当学園を構成する8年制の小学生も含めた全員に参加資格を拡げた。これは、俳句に興味を持ったポーランド語教師（ポーランド人にとっての「国語」の先生。もちろん日本語に関しては素人）たちが授業で俳句について教えたいという希望から来たものである。そこでコンクールの審査員メンバーも刷新し、筆者（高校で日本語とポーランド語を教える日本人）、ヨアンナ・クチ氏（小学校でポーランド語を教えるポーランド人）、津田モニカ氏（日本学者で俳人のポーランド人）という顔ぶれになった。

コンクールの期間は3月1日から31日まで。冬または春に材を取ったポーランド語の五七五を募集した。応募数は10句。季題は時候、動植物、生活など多岐にわたった（例えば、黒歌鳥、雌鹿、綿雪、

冬の寒さ、春陽、春花、大晦日のパーティー）。

入賞の三句は、十七音が瞬時に、鮮やかに情景を浮かび上がらせつつ、しかも効果的な「切れ」によって独特の広がりあるいは奥行きを醸し出している。覚えている読者もいるかもしれないが、ドミニカさんは3年連続の入選である。

* * *

参加資格の拡大で、どれだけの作品が集まるのか見当もつかない中、期待と不安をもって締め切りを待った。が、いざ蓋を開けてみると、10句。数え直してみても、やはり10句（去年より少ない）。すっかり肩透かしを喰らった格好になった。

理由はいくつもあるだろうが、その一つは間違いなく、コンクールの時期が不幸にもウクライナでの戦争と重なってしまったことだと思っている。

3月に入って当校でも、キーウなどから逃げてきたウクライナの子供たちが毎日のように編入してくるようになった。急遽「ウクライナ語」や「外国語としてのポーランド語」といった教科が作られ、学校全体が慌ただしさに包まれた。ウクライナ支援や戦争反対の運動も学園内で組織された。落ち着いて俳句に向き合える雰囲気はなかった。ポーランド、ヨーロッパ、世界中を揺るがしている大きな現実の一つの間にか囲まれ、巻き込まれながら、小さな日常の風景に眼差しを注いでいくことは確かに難しい。

それでも、選には漏れたが、ウクライナの状況を何とか五七五に詠もうとした応募句もあった。周囲の大きな悲劇を自分の痛みとして、小さな詩形に込めようとしている。

proszę pomóż mi	助けてよ
na mrozie zimne ciała	凍える体
daj mi się ukryć	隠させて

Dominika Jopek, 3A LOg ドミニカ・ヨペク、
高等学校3年A組（三年制）

（つだ・てるみち、ポズナン市エスコラピオス会
聖ヨゼフ・カラサンス学園高等学校教員）



新刊
紹介



『ミコワイ・レイ氏の鏡と動物園』

関口時正 (編/訳/著) (ポーランド文学古典叢書9) 未知谷 2021.11

西ヨーロッパにおけるルネサンスは3世紀にわたって(14~16世紀)花を咲かせた。しかしルネサンス文化はすべてのヨーロッパ諸国において同じ時期、同じ程度において発達したわけではない。イタリアではルネサンス文化の満開期が15世紀であったのに対してポーランドではこの新しい文化の最初の徴候が現われたのは16世紀前葉である。

そしてポーランド・ルネサンス文化の絶頂期はミコワイ・レイ(Mikołaj Rej, 1505~69)の『領主と村長と司祭、三者の間の短い会話』が出版された1543年である、と見なされている。この年はコペルニクスのラテン語で書かれた『天球の回転について』が出版された年でもある。16世紀はポーランド文明の「黄金の世紀」とよばれる。

この時代のポーランド文化に多大な影響を与えたものに三つの要因～人文主義、宗教改革、士族(シュラフタ)階級の政治活動～がある。ギリシャ・ラテンの古典古代に範をとる人文主義は文学に美の新しい理念をもたらして人間の尊厳と自由な生活の魅力を強調した。マルチン・ルター「九五箇条の論題」(1517)に端を発するプロテスタンティズムは、単に宗教活動にとどまらず、政治的・社会的運動と結びつき、国家の改革をもくろむ進歩的思想を生み出した。プロテスタンティズムの潮流は士族階級を巻き込んで、国政へと進出させた。ミコワイ・レイはこの三つの要因を具現した人物であり、時代精神の特異な文学的現象であった。

ポーランド文学の父

ポーランドのルネサンス文学においてはポーランド語とラテン語の二重使用が支配的であったが、イタリア風の人文主義の潮流の中にあつたレイは、母国語が古典古代の優れた文学の水準に達しうる芸術的表現手段であることを確信してポーランド語でのみ作品を書いた最初の作家であり、そのため「ポーランド文学の父」と称せられた。レイはプロテスタントであり、また士族階級に属し、国会の下院議員として政治に参入した。

本書は、レイの後期作品『鏡』と『動物園』に焦点を絞り、それらの作品の抄訳に解説を加えつつミコワイ・レイの人物と文学の全体像を浮き彫りにした優れた研究であり、翻訳書というよりはむしろ関口時正氏の著作とみるべきであろう。

『鏡』(1568)は、聖書と古典文学からの引用をちりばめた自由な瞑想であるが、規模の大きな作品でそのうちの最も重要な部門は3巻からなる『真面目な人間の一生』の題で知られる。ある士族で荘園領主の青年時代・壮年時代・晩年の3期にわたる理想的人生を描いた作品。そのうちの一部(第2章第16節)が翻訳されている。四季の移り変わりに応じた田園の日常生活における家事、農事が歳時記風に生き生きと描かれており、たいへん興味深い。『鏡』は全体として人生の最終的な評価の試みであり、経験と観察の総括である。

『動物園』(1562)は670篇に及ぶ韻文による風刺詩からの抄訳。教皇、修道院、大聖堂、聖遺物、ポーランドの国家体制など、カトリック世界に対する痛烈な批判と皮肉をふくんだ風刺詩にはレイのプロテスタント精神が鮮明に表明されている。一方では、人間の「常変わらぬ心」をゆるぎない棕櫚の幹や柳の辛抱強い常緑に、「希望」を凜として立つ櫛の樹になぞらえた一連の寓意詩には「人間性」を尊重する作者の真情がにじみ出ている。

『動物園』からの「こぼれ話」としての『フィグリキ』は鋭い皮肉がコミカルに表現された「笑話」で面白い。「教皇の軍隊を率いて進軍する枢機卿」などは「神の代理人」を任じて他国を侵略する現代のどこかの国の独裁者に当てはまる風刺でもある。

(栗原成郎、東京大学名誉教授)

『ヤヌシュ・コルチャックの教育実践』

子どもの権利を保障する施設養育の模索 大澤亜里(著) 六花出版 2022.2

本書は、ポーランドのヤヌシュ・コルチャック(1878-1942)の社会的養育事業・施設での教育実践を主題にした歴史的事実研究である。従来我が国ではこの人物の子どもの権利条約成立史とのつながりから、その子ども観や子どもの権利に関する思想的アプローチが盛んな研究対象であったが、その思想の源泉としての教育実践の研究という立場から地道に研究発表を重ね、達成した成果である。

コルチャック研究の進展

何よりも著者が現地ポーランド・クラクフでの語学留学にはじまり、ワルシャワ大学大学院(MC)での留学時に学んだことが下地になっている。そこでは、日本でもおなじみの W・タイス前ワルシャワ大学教授の指導を受けて、コルチャックの戦前の著作『子どもをいかに愛するか』(1918)をはじめとする作品やコルチャックに関する伝記的研究を手にするるとともに、1990年代から刊行がはじまり今年ようやく最終巻(第15巻)が出て、刊行がほぼ終了にたどり着いたポーランド語版コルチャック全集(Janusz Korczak, Dzieła, t. 1-16, Warszawa, 1992-)を入手して研究を進めた。

帰国後は北海道大学大学院(教育学)にて本格的に研究を開始し、関連する歴史研究書、社会福祉・教育史研究書、学術雑誌、また当時の教育・養育関連各種雑誌、そしてコルチャックの所属団体の年次報告書や実践同僚者たちの著作など、現在入手可能な限りの文献調査・収集にあたり、これらを利用して研究を組み立て、最終的に博士論文(2018年、北大大学院教育学院)として完成させたものである。

小児科医・孤児院長としての教育実践

本書では、若き小児科医時代のボランティア活動から、二つの孤児院の院長となる20年以上にわ

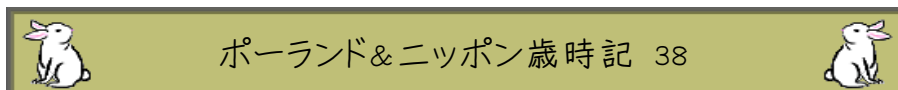
たる時期の、有名な「仲間裁判」を含む子どもの自律的自治活動を創造する多様な教育実践や活動総体の解明を目指している。なんと100年近く前の同国厚生省主催の養護施設職員向け研修で、彼は職員が「子どもの権利擁護官(オンブズマン)」となり子どもの権利リストの実現を任務とすべきと訴えていたことが最近わかったが、本書はそれが彼の教育実践を土台として成立したものと教えてくれる。



現在、わが国では、子どもの権利をめぐる国内の議論が、教育現場での子どもの権利の問題のみならず、子ども家庭庁の設置案や子ども基本法の制定案など、制度的な改革へと、ようやく踏み出そうしている。この議論の根をたどれば20世紀初めのコルチャックとその時代にさかのぼることができる(拙著『コルチャックと「子どもの権利」の源流』参照)。歴史を超えて響くコルチャックの子ども(人間)尊重の態度や思想、その具体的あり方を追求した彼の教育実践の内実について、ぜひ本書『ヤヌシ・コルチャックの教育実践』に触れ、じっくり考えていただきたい。

教育・福祉・ケアの仕事に関わる方のみならず、広く「大人」の皆様におすすめしたい一冊です。

(塚本智宏、札幌国際大学特任教授)



自然を眺める

今回の締め切りに何を書けばいいのかと考えていたら、辛い時に助けとなるものについて書けばいいのでは、と友達に言われました。やはり自然を眺めることでしょうか。

w wieczornej zorzy	夕焼けに
młodych listków na drzewach	若葉の香り
zielony zapach	蒼々と

Monika Tsuda, Poznań ポズナン市、津田モニカ

sad po sąsiedzku	園に客
wita gości zapachem	香りで迎える
kwiatów jabłoni	花林檎

Piotr Wrzeciono, Warszawa ワルシャワ市、ピョトル・ヴジェチョノ

寒
戻り
死
神
ブ
ー
チ
ン
ほ
ほ
ゑ
む
や
返
返
る
ブ
ー
チ
ン
戦
争
め
ち
ゃ
く
ち
ゃ
だ
砲
撃
の
中
立
っ
て
ゐ
る
冬
木
哉

岩見沢市、霜田千代磨

『ポーランド児童救済事業の記録』

『波蘭児童関係日誌』1920～1922年 宇都榮子ほか(編/著) 彩流社 2021.12



本書は1920～22年の日本赤十字社による「シベリア孤児救済事業」100周年にふさわしい、画期的な待望の書である。

【本書刊行の意図とその構成】日赤の救済事業について(優れた先行研究の蓄積はあるが)その二大史料『波蘭(ポーランド)児童関係日誌』(東京『日誌』)と『大阪日誌』の全容はこれまで明らかにされていない。未来の子供達の安定確保の方策を考察するためにも、両『日誌』および関係新聞雑誌記事の翻刻紹介には大きな意義がある(15～20頁)。

【本文編】[第1章]ポーランド国児童救済事業開始までの経緯[第2章]同救済事業(総計765人のポーランド児童が母国に帰還)[第3章]貞明皇后からの下賜、各団体による慰問、日本国民の同情[第4章]『日誌』から読み解くポーランド児童日本滞在中の暮らし、についてまとめてある。

【史料編】1.両『日誌』 2.日赤、福田会の機関誌『博愛』『フクデン』 3.～5.新聞・雑誌掲載のポーランド児童関係記事の翻刻(183～738頁)。

『日誌』以外のポーランド児童関係史料は関東大震災(1923)のため消失した。本書では日誌の内容の補完のため史料2～5を所収し、それらを精密に接合して救済事業の全容を立体的に再構築している(61, 139～140頁)。

100年前の世界は第一次世界大戦(1914～18)直後、「国際連盟」出発のとき、日本では「大正デモクラシー」「社会連帯責任」の思想の普及などを背景に「社会事業成立」のときだった(22～24頁)。

【要点】①東京の生活施設は「福田会」(仏教系の孤児養育施設)で、隣接する日本赤十字病院=「医療の最先端の病院」により献身的な医療活動が進められた。腸チフス集団感染のときには、終始早期発見・早期治療、日常生活の衛生面・病気の予防

にも深く真心こもった注意とケアが実施され、日本滞在中に児童の死亡者はいなかった(81～83頁)。

②日波双方の児童たちは短期間に相互の言葉を解するようになり、第1日目から仲良く活発に遊び、慰安会などで「二つの国歌」を共に歌って友愛を深めた(565～572, 722頁)。長い実績をもつ「福田会」が救済事業の教育・福祉面で果たした役割は、日赤の医療活動と並んで非常に大きい。

③多数の日本国民がポーランド児童を戦乱の犠牲者として同情し、有形無形の支援を提供し救済事業を底辺から支えた。児童を励ますため各種慰安会や遠足が日赤と関係団体の相談と調整の上で整然と実施され、児童たちに大きな喜びと生涯忘れ得ぬ思い出を残した。

④救済事業を行なう側(日赤本部、各地方支部)と受ける側(波蘭児童救済会)がお互いを尊重理解し事業を展開した(38頁)。ポーランド児童は同国の付添人の指導監督の下、10人単位で自炊・洗濯などを行い、1日の生活リズムは規則正しく、朝夕の祈祷・日曜教会出席(公教青年会の支援)は必ず行い、祖国の宗教・家族との絆を毎日心に刻んだ。

【結語】帰国した児童たちは固い絆を保ち1929年以降「極東青年会」を運営、第二次大戦下にはレジスタンス組織の中核「イエジキ部隊」を結成、ワルシャワ蜂起では多大な犠牲者を出した。

100年前のこの救済事業は「普遍的な人道支援」として「未来の両国の関係史」に重大な意義をもつ。今後の両国の研究・対話の発展に期待したい。本書はその歴史的な出発点になるであろう。

(石田レイ子、新潟虹の会代表)



避難する
ウクライナの人々
とともに



ウクライナから避難した人々を迎えて

寺田 頼子

3月6日(日)朝9時前にドアをノックする音が聞こえ、夫のピョートルがドアを開けると、隣人のバーシャから「昨夜ワルシャワ西駅でウクライナから避難した人々を助けるボランティアをしていたところ、行き先がなく途方に暮れているウクライナ人親子に出会ったのだけど、滞在できる部屋はありませんか?」と相談がありました。



2月24日に戦争が始まってから、避難民を自宅で受け入れるポーランド人の姿をニュース等でたくさん見てきました。隣国ウクライナで起きている恐ろしいことを想像すると、ポーランドに住む者として助けることは当たり前のように感じ、キーウから避難してきたお母さんオラ、息子さんたち(17歳のアルテムと3歳のプラトン)を隣人と共にサポートすることになりました。

ワルシャワで

それからは、戦争が長引くことを踏まえ、できるだけ早くワルシャワで生活基盤を整えることを考え始めました。元々ポーランドの大学への進学を希望していたアルテムはポーランド語を勉強していたので、近所の高校にもすぐに受け入れてもらえ、プラトンの保育園もすぐに見つかり、給食代も無料にしてもらえました。周りの知り合いもすぐに服や食料を支援してくれたり、ウクライナ人への各種割引やサポート体制も整備され、ポーランド社会の寛容さと優しさに触れる日々です。

人口の15%以上もの避難民を受け入れているワルシャワの街を歩くとウクライナの国旗であふれ、通りでは当たり前のようにウクライナ語やロシア語が聞こえます。避難生活の長期化とともに、住居や仕事の問題も大きくなりそうです。我が家に滞在中のオラはポーランド語を習い始め、仕事も見つかり、アルテムもポーランドの大学に進むことを決め、ポーランドへの移住に向けて歩み始めています。

ポズナンで

3月末からは、学生時代を過ごしたポズナンでウクライナ人親子2組をサポートすることになり、時々週末にポズナンに出向き、住環境の整備、買い出しや通訳などお手伝いをしています。スウェーデンに住む妹の友人の友人の親戚というご縁です。

スウェーデンやドイツ、さらに西側に避難しているウクライナの人たちもたくさんいるのですが、やはり地理的にも文化的にも近いポーランドに残りたい人が圧倒的に多い状況です。

ザポリージャから避難してきたお母さん2人と子供3人で、お母さんたちは学校の先生の仕事をオンラインで続けています。ウクライナに残してきた家族、ペット、自宅のことが心配で早く帰りたい気持ちをこらえながら、地下のシェルターで怯えて過ごした不安な日々を子供たちに二度と体験させたくないと感じ、希望を捨てずに過ごしています。

ポズナンの親子は普段はロシア語を話し、私は英語でのコミュニケーションとなります。そのため、日本人である私がウクライナ人とポーランド人の店員の間に入り、英語からポーランド語に通訳をするというなんとも奇妙な光景になったりもします。

今回、日本の友人からもたくさんの応援メッセージやサポートをいただき、心強く感じています。少しでも早く平和が戻ることを願って、微力ながらも支援を続けていきたいと思っています。

(てらだ・よりこ、ワルシャワ市在住、伊達市出身)

どこで暮らしてもいいけど、我が家がいちばん Wszędzie dobrze, ale w domu najlepiej

ミハウ・マズル

1939年に第二次世界大戦が勃発したとき、イギリスやフランスとの同盟関係があったものの、私たちポーランド人は、事実上ドイツと単独で交戦しなければなりません。もちろん外からの支援がなかったので、我が国は善戦したものの敗北してしまい、その結果、ワルシャワなどポーランドの重要な国土の大部分がドイツに占領され、500万人以上の人々の命が失われ、貴重な文化財や歴史的建造物が破壊されました。この時とりわけ、多くの若者、知識人が虐殺されたため、ポーランドは失われたものを取り戻すために多くの歳月が必要でした。

ウクライナの人々を支援するポーランド人

それゆえ今回のウクライナとロシアの戦争は、ポーランドの人々の戦争の国民的記憶を激しく揺り動かしたのです。今年の4月に行われたある社会調査によれば、約77%のポーランド人が、ウクライナ人難民を支援したいとの結果が出ています。外国では、ポーランド人は互いにあまり協力的でない

との悪い評判がありましたが、今回の戦争はポーランド人の心を一つにまとめる役割を果たしました。国が本当に危機に直面した時には、ポーランド人はそれまでの対立を忘れて、その危機への対処のために団結することができるのです。

2022年5月初旬現在、ポーランドには300万人を超えるウクライナ市民が避難してきましたが、これほど多くの難民のためのポーランド人からの支援

は衰えることなく、ますます力強く行われ続けています。この難民の数はポーランドの人口の約8%にも至っており、多くの日本人は、その数字に驚いているようです。さらにポーランド人がウクライナ人から大変な迷惑を受けているのでは、とすら尋ねられることもあります。

しかし私たちの視点からすれば、このようなウクライナ人への大規模な支援活動は、迷惑などでは全くなく、むしろ当然なことなのです。かつて第二次大戦が勃発した当初、確かにポーランドは同盟国からの支援が得られず、それは深刻な戦禍をもたらしました。しかしポーランド人は逆に、その歴史的経験から、国際的な連帯と支援の重要性を強く認識したのです。

とりわけウクライナの兵士たちが、自分の子ども、

妻、そして老人たちがポーランドで暖かく守られており、とくに子どもたちがウクライナの未来のための教育をポーランドで続けているがゆえに、命懸けで祖国を守るために戦えるのだと、私たちポーランド人は確信しています。

ポーランドには「Wszędzie dobrze, ale w domu najlepiej」ということわざがあります。日本語では「どこで暮らしてもいいけど、我が家がいちばん」という意味です。私たちはウクライナの人々が我が国で快適に暮らしていけるように努力していますが、ウクライナの人々にとっても、我が家が一番だと思います。戦争が一刻も早く終結し、平和な暮らしがウクライナに戻り、彼らが我が家で安心して暮らせる日々が再び訪れることを私は心から願っています。

(Michał Mazur 北大大学院教育推進機構 特任助教)

ご寄付 (2022.12~) 感謝申し上げます

(1口千円、敬称略)(7)霜田英麿(2)川染雅嗣、高橋健一郎

今年度 (2021.9~2022.8) 会費納入のお願い

年会費(一般3,000円、学生1,500円)また、維持会費としてご寄付(1口千円)も承ります。

【ゆうちょ銀行振替口座】記号02740 5 番号19735 【加入者名】北海道ポーランド文化協会 (または)

[北洋銀行(本店営業部)普通預金口座][店番号]028[口座番号]0605084

[加入者名]ホッカイドウポーランドブンカキョウカイ(北海道ポーランド文化協会 会長 安藤厚)

※ご請求額は個別の納入依頼(振替用紙同封)をご覧ください。

※遠方の方はご寄付 年千円で会誌 POLE の定期読者になっていただくこともできます。事務局にお問合せください。

POLE106 目次

《第100回例会》ポーランド名画ビデオ鑑賞&交流会『赤い闇~スターリンの冷たい大地で』(氏間多伊子)・・・ 1

《緊急座談会》『ピアノ~ウクライナの尊厳を守る闘い』を観て(池田光良・氏間多伊子・小笠原正明・川染雅嗣・徳田貴子)・・・ 2

《アマレヤとともに》アマレヤ劇団の方々と一緒に対雁を訪れて(檜木貴美子、新井藤子)／アイヌ女性とアマレヤ劇団の5年間の繋がり(多原良子)／アイヌとカムイのためのレクイエム(丸山博)・・・ 5

ブロンスワフ・ピウスツキに関する新刊書の出版記念会(ヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカ)・・・ 8

《第101回例会》第11回朗読会「午後のポエジア」(予告)・・・ 9

ブロンスワフ・ピウスツキと紙芝居~朗読者の対談から／ご挨拶(新井藤子、R・ジエプカ、K・ノヴァク)・・・ 10

《ポーランドだより》13 第3回「HAIKU 日本の詩形」コンクール(2022年)入賞句(津田晃岐)・・・ 11

《新刊紹介》『ミコワイ・レイ氏の鏡と動物園』(栗原成郎)／『ヤヌシュ・コルチャックの教育実践』(塚本智宏)・・・ 12

《ポーランド&ニッポン歳時記》38(津田モニカ、ピョトル・ヴジェチョノ、霜田千代麿)・・・ 13

《新刊紹介》『ポーランド児童救済事業の記録』(石田レイ子)・・・ 14

《避難するウクライナの人々とともに》ウクライナから避難した人々を迎えて(寺田頼子)／どこで暮らしてもいいけど、我が家がいちばん(ミハウ・マズル)・・・ 14

	発行 北海道ポーランド文化協会		ポーレ編集委員会
	〒060-0018 札幌市中央区北 18 条西 15 丁目 3-19 安藤方 TEL・FAX 011-556-8834、hokkaidopolandca@gmail.com		安藤厚／新井藤子 氏間多伊子／熊谷敬子 塚本智宏／松山敏
東京事務所 〒107-0052 東京都港区赤坂 9-6-29-309 音響計画(株) 霜田気付 TEL 03-6804-1058 FAX 03-6804-6058			



北海道ポーランド文化協会誌
「ポーレ」第106号 別冊

本会は今年で創立35周年、例会も記念すべき第100回を迎えました。創立当時は、ポーランドで「連帯」運動が高揚し、「POLE」誌上でも毎月ポーランドの政治・社会情勢が伝えられていました。今回のウクライナ危機では、隣国ポーランドが支援の最前線に立っています。事態が正義と人道に基づいて一刻も早く解決されることを願っています。 会長 安藤厚



第100回
例会



18:30 お話
19:00 ビデオ鑑賞会
21:00 交流会

2022.6.1 札幌エルプラザにて

■ ■ お話 ■ ■ 池田光良氏をご紹介します

博士（工学）、技術士（応用理学）、APEC エンジニア（Civil）



地下水技術者。資源、土木、環境、防災等地下水に関わる分野の調査解析を行っている。日本地下水学会誌編集委員、『地下水用語集』編集委員、同学会地球温暖化検討委員等を歴任。受賞歴：日本地下水学会功労賞、国土交通省優良業務表彰3回（千葉県小塚山、釧路湿原の保全）。著書（共著）：新・名水を科学する、地震による地すべり災害。札幌映画サークル、北の映像ミュージアム会員。映画歴66年、2700本。



映画『赤い闇 スターリンの冷たい大地で』と

その背景

池田 光良

近年、本作および『DAU. ナターシャ』『DAU. 退行』『スターリンの葬送狂騒曲』『国葬』『粛清裁判』さらには数本のドキュメンタリーなど、ウクライナ・スターリニズム関連映画の公開が相次いだ。2014年、ウクライナで親ロシア派のヤヌコヴィッチ政権を倒した「ユーロ・マイダン革命」とそれに対する報復としてのロシアのクリミア侵攻、これに対し映画人が強い危惧を示したためである。その懸念が不幸にも今回の「ウクライナ侵攻」へと繋がってしまったのは残念である。

ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』の劇中劇「大審問官物語」は共産主義国家の成立とスターリンのような独裁者の出現を予言したものと見なされてきた。ウクライナ侵攻を命じたロシアのプーチン大統領も、スターリンとは程度の差こそあれ、大審問官タイプの政治家であり、今回のような事態を招くのではと懸念されてきた。

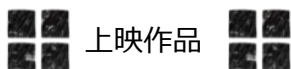
ウクライナはヨーロッパ有数の穀倉地帯であり、南は黒海に面して不凍港を有し、政治的緩衝地帯であるため昔から紛争等が相次いだ。その最たるものは1932～33年のホロドモール（スターリンが穀物を輸出専用としたために生じた人為的大飢饉）であり、進化論・遺伝学に反した“ルイセンコ学説”による農業政策が行われたことが飢餓を助長した。

その後、5か年計画と農業集団化の強行、ホロドモール隠匿などのため、1937～38年をピークとして科学者（ランダウ）や芸術家（メイエルホルド）を含む多数が粛清の嵐に巻き込まれた。

『DAU』シリーズは、ソ連最高の科学者であるランダウ（ノーベル物理学賞）のウクライナ時代以降の純粋科学を守る闘いと投獄、苦悩と反骨の精神を背景としたフィクションで、狂気とリアリティー、情報管理社会の恐怖に私は強い衝撃を受けた。公開された2本だけでも8時間30分、「史上最も狂った映画」と呼ばれ、ロシアでは上映禁止である。

さらに『国葬』『粛清裁判』ほどロシア社会の洗脳の厳しさを明確にした作品は過去には見られない。今回の事態があっても、なぜプーチン政権が高い支持率を保っているのかを考えさせる。

また、ランダウ関連本を読むと表現や学問の自由への困難さが良く分る。2014年の特定秘密保護法施行以降、研究発表時における守秘義務の壁が年々厳しさを増しつつあり、上述の作品群は私には人ごとではなく、ウクライナの状況と全く無縁ではないと感じている。真実の解明のために闘った本作の主人公ガレス・ジョーンズやジョージ・オーウェルの生き様から何かを汲み取っていただければ幸いである。 (いけだ・みつよし)



赤い闇

スターリンの冷たい大地で

ソビエト連邦がひた隠しにした歴史の闇を照らし出す衝撃作！
実在したジャーナリスト、ガレス・ジョーンズによる告発の物語

■ 2019年製作 | 118分 | PG12 | ポーランド・イギリス・ウクライナ合作 | 原題：Mr. Jones

■ 2019年 第69回ベルリン国際映画祭コンペティション部門出品



登場人物 (左から)
ウォルター・デュランティ
ガレス・ジョーンズ
エイダ・ブルックス

ポーランド映画『赤い闇 スターリンの冷たい大地で』は、スターリン体制にひとり立ち向かったジャーナリストの実話に基づく歴史ドラマ。ソ連の過酷な収奪・弾圧と徹底した情報統制の実態が暴かれる。

英国人記者ガレス・ジョーンズは、世界恐慌の嵐のなかソ連だけがなぜ経済的繁栄を誇っているのか？ これは共産主義成功の証しか？ 疑問をもち、取材のため単身モスクワを訪れ、ウクライナ潜入を試みる。嚴重な監視のなか、彼は母が暮らした土地にたどり着けるだろうか…

映画で描かれる1932～33年ウクライナにおける(食糧徴発による)人為的大飢饉(ホロドモール)では、400万～700万人強が餓死または強制収容所で死亡したと推定され、スターリンによる「ウクライナ人に対するジェノサイド」として十数カ国が認定している。

■ 主な登場人物

- ・ガレス・ジョーンズ: 主人公。ロイド・ジョージ英国首相の外交顧問、ヒトラーへの取材など華麗な経歴をもつ若き英国人記者
- ・ポール・クレブ: モスクワにいる彼の友人記者。「大きな情報をつかんだ、想像以上に厄介な状況だ…」と電話で伝えるが、突然消息を断つ。
- ・ウォルター・デュランティ: ピューリッツァー賞受賞記者。ニューヨーク・タイムズモスクワ支局長。ソ連に同調し大飢饉の事実を否定する。

アグニェシュカ ホランド

■ Agnieszka Holland 監督

1948年ワルシャワ生まれ。プラハで映画制作を学び、70年代からアンジェイ・ワイダ運営の映画ユニット「X」に所属しワイダ作品の脚本も手掛ける。1980年、国際映画批評家連盟賞受賞。



- ・エイダ・ブルックス: ニューヨーク・タイムズモスクワ支局の女性記者。ナチス・ドイツから逃れソ連に期待を賭けたが…
- ・ジョージ・オーウェル: (映画の時点では) 新進作家。後に、スターリン体制を痛烈に批判した風刺小説『動物農場』(1945)、全体主義的ディストピアを描いた『1984年』(1949)などで有名になる。『動物農場』の農場主の名前が“ジョーンズ”なのも興味深い。

翌年の戒厳令を機に西欧に移住。86年アカデミー外国語映画賞ノミネート、91年『僕を愛したふたつの国～ヨーロッパ ヨーロッパ』でアカデミー脚本賞ノミネートなど、世界中を舞台に活躍している。

photo by Slawek 2011/9

(文 氏間多伊子)

【入場無料】 申込み先↓ (必須: 氏名・連絡先をお知らせください)

☎ 011-384-5984 (園部、Fax 共) / ✉ hokkaidopolandca@gmail.com

※会場が休館となる場合は延期または中止します。
感染防止のため手指消毒・マスク着用をお願いします。

※今後、取り上げてほしいポーランド映画がありましたら、ご意見、ご要望をお知らせください。

2022.7.3 (日)

13:30～ 開場 13:00

札幌エルプラザ

4階中研修室

(北8西3)

入場無料

どなたでも参加できます!



第101回例会

第11回 朗読会 午後のポエジア

<プログラム>

13:30 【ビデオメッセージ】^{ロドヴィッチ} Rodowicz 元駐日大使

13:40 【第1部】 詩劇『祖霊祭』

14:20 【第2部】 希求・日本 (朗読ほか)

15:00 【第3部】 希求・ポーランド (朗読ほか)

下院 (Sejm) の決議により、今年は以下の3つの記念の年です。

マリア・コノプニツカ

生誕 180年

Maria Konopnicka (1842～1910) は詩人・小説家・児童文学作家・ジャーナリスト・批評家。女権拡大と祖国独立のために活動した。



1897年 撮影

ユゼフ・ヴィビツキ没後 200年

Józef Wybicki (1747～1822) は、ポーランド最後の王に仕え、その後も祖国独立のために尽くした作家、政治家。独立回復後に国歌となった「ドンブロフスキのマズルカ」の作詞者として知られる。その活動を紹介する動画の上映を予定。



ヴィビツキ



ポーランドロマン主義 200年
国民的ロマン派詩人アダム・ミツキェヴィチ Adam Mickiewicz (1798～1855)の第一詩集『バラードとロマンス』が1822年に刊行された。

ミツキェヴィチ

第11回「午後のポエジア」ではヤドヴィガ・ロドヴィッチ元大使の「ポーランド・アイヌ『祖霊祭』シンヌラッパ・クンネニサツ」プロジェクトに協力して『祖霊祭』(ミツキェヴィチ作 1823)を取り上げます。

【第1部】では『祖霊祭』第二部(関口時正訳 2018)を「午後のポエジア」出演者が朗読します⇒



日・ポ共同創造演劇
『DZIADY 祖霊祭』
2019-20より
©Maciej Zakrzewski

『祖霊祭』は四部からなり、各部は独立した作品とも呼べる、成立・公刊時期の異なる複数のテキスト群の総称。その「第二部」は、最終的に天国へ行くとも地獄に落ちるとも決まっていない、未だ煉獄にあつて「浮かばれない」霊を呼び出す、民間習俗としての祖霊祭を描いている。

[出演者(配役)予定]村咲紫音(コロス)、村田譲(祭司)、林家とんでん平[ゲスト、落語家](老人・声・木菟・鳥たちのコロス)、氏間多伊子(天使)、ラファウ・ジェプカ(亡霊)、菅原未榮(大鴉)、シルヴィア・オレーヤージュ(娘)ほか

【第2・3部】では〈希求〉をテーマとします。

[演目(出演者)予定](霜田千代麿)、自作詩「アムールへ」(菅原未榮)、太宰治「待つ」(氏間多伊子)、コノプニツカ「愚痴を言うステファン君」(ラファウ・ジェプカ)ほか



午後のポエジア 2019
歌シウワジェヴェチカ

お誘いあわせの上、是非ご参加ください。(会長 安藤厚)

出演/鑑賞のお問合せ・申込み先(氏名・連絡先を→安藤へ)

080-4071-0956, hokkaidopolandca@gmail.com

◆演目・出演者は変更する場合があります。
◆新型コロナウイルス感染拡大防止にご協力をお願いします。(マスク着用、手指消毒等)

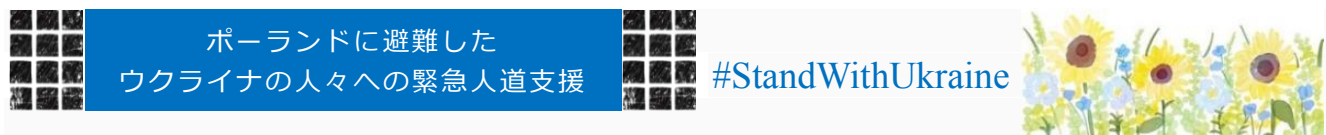
共催



協力



The year of Polish Romanticism



ウクライナにおける戦争のため、国内避難者は770万人、国外避難者は590万人（うちポーランドへ325万人）以上にのぼり（UNHCR website より、2022/05/10 現在）、さまざまな組織・団体が緊急の人道支援に取り組んでいます（POLE106_p.14-16 参照）。これらの活動への支援の寄付について、参考情報をお知らせします。（会長 安藤厚）

情報源① 駐日ポーランド共和国大使館 website より

<https://www.gov.pl/web/nippon/donatetoukraine?fbclid=IwAR3wtJGNDt7oNNHLbsGoPVif9Cmn1ZEZRyeMyW6zGWxpmARnSXcXW5GKR6k>

〈もしあなたが、ロシアによる武力行使を受けているウクライナおよびウクライナ人を支援する団体への援助を考えていただけるのであれば、下記をはじめとするポーランドの人道支援団体への寄付を是非ご検討ください。以下の団体への寄付は日本国内の銀行にお振込が可能です。皆様のご支援に心より感謝いたします。〉

1. 社会福祉法人福田会 <http://fukudenkai.org/supportukraine/>
 ※100年前の「ポーランド孤児救済」活動に貢献した「福田会」がいまクラクフ市でウクライナから避難してきた人々の支援活動を行っています。
 [クラウドファンディング] https://readyfor.jp/projects/fukudenkai_ukraine
 [口座情報] 銀行名：さわやか信用金庫 支店名：広尾白金支店
 口座種別：普通預金 口座番号：1177223
 口座名義：社会福祉法人福田会ウクライナ支援寄附口座
 問合せ先：koho@fukudenkai.or.jp / 080-9093-8472 / 03-5466-0459（担当：我妻）
 ※お振込の際は寄附申込書の提出をお願いしております。（書式は裏面 p.2 を参照）
2. 在日ポーランド商工会議所（PCCIJ） www.pccij.or.jp
 [口座情報] 銀行名：三菱 UFJ 銀行 支店名：渋谷支店 支店番号：135
 口座種別：普通預金 口座番号：3943875
 口座名義：在日ポーランド商工会議所
 問合せ先：secretariat@pccij.or.jp

情報源② 日本国外務省 website より

https://www.mofa.go.jp/mofaj/erp/c_see/ua/page4_005527.html

1. 駐日ウクライナ大使館
 [口座情報] 銀行名：三菱 UFJ 銀行 支店名：広尾支店 支店番号：047
 口座種類：普通口座 口座番号：0972597
 口座名義：エンバシーオブウクライナ
 問合せ先：電話：03-5474-9770 / FAX：03-5474-9772

情報源③ NHK website より

<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20220325/k10013552321000.html>
 UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）、日本ユニセフ協会、WFP（世界食糧計画）、UNFPA（国連人口基金）、日本赤十字社、国境なき医師団ほか

POLE no.106 (May 2022)

Newsletter of the Hokkaido-Poland Cultural Association

Table of Contents

Video screening of the Polish film "Mr. Jones" by Agnieszka Holland on 01/06/2022 (announcement: T. Ujima)	1
Watching the Polish TV Movie documentary "Piano" by Vita Drygas (roundtable discussion: M. Ikeda, T. Ujima, M. Ogasawara, M. Kawasome and T. Tokuda)	2
Visiting Tsuishikari with members of the Amareya Theatre (K. Naraki and F. Arai) / Five-year connection between Ainu women and the Amareya Theatre (R. Tahara) / Requiem for Ainu and Kamui (H. Maruyama)	5
Bronisław Piłsudski. The Grand Opening (book launch): 1. "Opowieść o Bronisławie Piłsudskim. Polak nazwany Królem Ajnów" by K. Sawada, translated by B. Słomka; 2. "Bronisław Piłsudski. Dziennik 1882-1885" (J. Rodowicz-Czechowska)	8
11 th reading session on Polish literature "Afternoon Poesia" on 03/07/2022 (announcement)	9
Bronisław Piłsudski and Picture Story Show (Kamishibai) - From the dialogue between the reciters (F. Arai and R. Rzepka) / Message (K. Nowak)	10
Excellent poems at the 3 rd contest "Haiku - poezja japońska" 2022 at St. Joseph Calasanz Piarist School Complex in Poznań (T. Tsuda)	11
(New Books) "Mirror" and "Zoo" by Mikołaj Rej", translated by T. Sekiguchi (S. Kurihara) / "The Educational Practices of Janusz Kolczak" by A. Osawa (Ch. Tsukamoto)	12
Haiku Yearbook: Poland & Japan 38 (Monika Tsuda, Piotr Wrzeciono and Ch. Simoda)	13
(New Books) "Record of the Polish Siberian Children Relief Services" (R. Ishida)	14
#StandWithUkraine: Welcoming Refugees from Ukraine (Y. Terada) / Wszędzie dobrze, ale w domu najlepiej (M. Mazur)	14
Polish film "Mr. Jones" and its background (M. Ikeda)	(appendix 1) 17
11 th reading session on Polish literature "Afternoon Poesia" on 03/07/2022 (flyer)	(appendix 2)
#StandWithUkraine: Where to Donate	(appendix 3)